

ダーウィニズム以後のユートピアの不可能性について ベラミーの『かえりみれば』とギルマンの『女の国』

丹治 陽子

On the Impossibility of Utopias in the Post-Darwinian Period Bellamy's *Looking Backward* and Gilman's *Herland*

Yoko TANJI

本論は、世紀転換期のアメリカのふたつのユートピア小説、エドワード・ベラミー (Edward Bellamy) の社会主義ユートピア『かえりみれば』 (*Looking Backward: 2000-1887*, 1888) と C. P. ギルマン (Charlotte Perkins Gilman) のフェミニズム・ユートピア『女の国』 (*Herland*, 1915) をテキストとしてユートピアニズムとダーウィニズムの関係を検討しながら、ダーウィニズム以後のユートピアニズムに孕まれている不可能性ないしパラドックスについて考察するユートピア論である。

歴史の終焉としてのユートピア

ユートピアとは、言うまでもなくトマス・モア (Thomas More) の造語として、「実在しない場所 (ou-topia=no place)」であり、また、「理想的な場所 (eu-topia=good place)」ということでもある (“An ideal place that does not exist in reality”¹)。その理想的な場所を、遠い未知の空間に設定すれば空間的ユートピアとなるが、その一方で、遠い未来に設定すれば時間的ユートピアとなる。

たくさんの未知の空間が発見されつつあった大航海時代に書かれたモアの『ユートピア』 (*Utopia*, 1515) が空間的ユートピアであるのはもちろんだが、進歩の観念が確立した18世紀以降はしだいに後者の比率がふえてくる。しかし、19世紀の後半になっても、ウィリアム・モリス (William Morris) の『ユートピアだより』 (*News from Nowhere*, 1891) のような時間的ユートピアに並行して、ブルワー＝リットン (E. G. E. L. Bulwer-Lytton) の『来るべき種族』 (*The Coming Race*, 1871) のような空間的ユートピアが書かれている。ユートピアが西暦2000年に設定されている『かえりみれば』は前者の例であるが、隔絶した高地に設定されている『女の国』は後者の例である。

ユートピアとは理想の実現した完璧な世界として一種の静的なたたずまいをもっている。当然ではないだろうか。というのはユートピアとは、ユートピアの実現にむけた闘争の歴史が終わったときはじめて出現する、欠けたところのない「理想的な場所」だからである。要するに、ユートピアとはひとつの完成された世界として「歴史の終焉」を意味している。ロジャー・リー・エマソンがユートピアの特質のひとつを、「歴史が無視されている永遠の静止社会」²と定義しているのは、同様なことを意味しているだろう。

ユートピアが「歴史の終焉」を意味していることは、19世紀後半の階級闘争の歴史が終息し「秩序と平等と幸福の楽園」³と形容されうる一種の社会主義の実現がえがかれている『かえりみれば』の時間的ユートピアにおいて明らかであるばかりでなく、地域的隔絶が起こって以降2000年の時間のなかで姉妹愛の世界を実現した『女の国』の空間的ユートピアにおいてもあてはまる。

まずは歴史の終焉のプロセスを、ふたつのユートピアにかんして具体的に見ておこう。

ハーランド

女の国へいたる歴史

「女の国」あるいは「フェミニジア」⁴と呼ばれるギルマンのユートピアが設定されるのは、険しい崖に囲まれた美しい高地である。『女の国』と相前後して出版されたコナン・ドイル (A. Conan Doyle) の『失われた世界』(*The Lost World*, 1912)におけるギアナ台地を思わせるその高地は、今から2000年前、火山の爆発と地震によって他の地域から隔絶されることになり、独自の発展を遂げるようになった。ドイルの作品におけるように、それ以外の地域では絶滅した恐竜その他の古代生物が残っているというわけではないが、地域的隔絶の結果として、あるいは人為的な選択によって、たしかに別種の生物相がつけられている。

このユートピアの生物相の最大の特徴は、そこに住んでいる人間が女性だけであるということである。そのようになった歴史的経緯は『女の国』第5章に記されている。

西暦紀元ごろ、このあたりは奴隷制をともなった一夫多妻制を採用する部族が住んでいた。そこに戦争が起こり、多くの人びとが死んだが、生き残った人びとは奥地にひっこんで生きることになった。そこに今度は火山の爆発が起こって地震が発生、それによって奥地から海岸線においてくる唯一の道がふさがるとともに、その場所に土地の隆起が起こり、外界と遮断された世界ができあがった。

不幸なことに、男性のほとんどが加わっていた軍隊は、隆起した土地の下敷きになって壊滅。生き残った男性といえば、ほとんど奴隷と子どもだけだったが、この混乱に乗じて奴隷たちは反乱を起し、自分たち以外の、男の子をふくむ生き残った男性のすべて、および年輩の女性を殺害し、みずから支配者になる。しかしそこで若い女性が残忍な元奴隷の支配者にたいして立ち上がり、かつて女奴隷だった者をのぞいて彼らを滅ぼしてしまう。こうして、奴隷の反乱と女性の蜂起という闘争の歴史をへて、女性だけの世界があらわれるのである。

女性だけが残された世界のなかで、女性たちは生存のために土地を耕して農業をはじめ。しかし子どもが生まれないうち、その協同生活はいつか終わってしまうだろう。ところが、「5年か10年」(H56)がたったときひとつの奇跡が起こる。ひとりの若い女性が単為生殖(処女生殖)によって、すなわち女性だけの性によって子どもを産んだのである。「新しい必要という圧力」のもとで「未知の力(unknown powers)」(H56)が発達してきたということなのである。

その後も、単為生殖というこの「未知の力」のおかげで同じ女性から4人の子どもが生まれる。合計5人であるが、そのすべてが女性である。彼女たちは成長し、今度は彼女たち自身が「未来の母(Mothers of the Future)」(H56)となり、それぞれ5人ずつの女子を出産する。そしてその25人の女性も、また5人ずつの女子を——という次第で、第4世代までに155名の「新しい人種(a new race)」(H57)が誕生することになったのである。

その後も同じ30年に5倍という割合で「新しい人種」が増えつづけていく。その結果として、あらゆるユートピアが必然的に孕まざるをえない問題が、「女の国」というフェミニズム・ユートピア

を襲うことになる。それは、1790年代のウィリアム・ゴドウィン (William Godwin) やコンドルセ侯爵 (Marquis de Condorcet) などの啓蒙主義的ユートピア論⁵ のあとに、ユートピアの不可能性を主張したT. R. マルサス (Thomas Robert Malthus) の『人口論』 (*Essay on Population*, 1798) が指摘していた問題にほかならない——食糧が等差級数的にしか増加しないのにたいして人口が等比級数的に増加していく以上、必然的に食糧を求める闘争が生じざるをえない、ということである。

「女の国」の現在の人口は、大人200万人、子ども100万人の総計300万人ということになっているので (H77 & 88)、単純な数学の計算をするかぎり、人口過剰の危機はだいたい240年後に「女の国」を襲ったことになる。

そして国が人でいっぱいになってきた。30年ごとに人口が5倍になれば、ほどなく限界に達してしまう。とくにこういう小さな国においてはなおさらだろう。彼らはすぐに草を食む家畜のすべてを除去した——最後に姿を消したのは羊だったと思う。と同時に彼女たちは、ぼくがかつて耳にしたこともないようなすばらしい集約農業のシステムをつくりだした。森という森の木を、果実と木の実のなる木に植えかえたのだ。

しかし、どんなことをしようと、まもなく彼女たちは「人口の圧力」という問題に、じつに深刻なかたちで直面することになった。人口の過剰が生じ、それとともに不可避免的に生活水準の低下が起こった。(H68)

このユートピアの第一の歴史的転換期が、女性が単為生殖というかたちで子孫を増やしはじめたときだったとすれば、第二の転換期は、限られた土地から産出される食糧の量にたいする人口が飽和の段階に達したときだったのである。

チャールズ・ダーウィン (Charles Darwin)、そしてダーウィンとともに「自然選択」による「進化」論——ダーウィニズム——の主唱者となったA. R. ウォレス (Alfred Russel Wallace) が、彼ら共同のアイデアを別々に思いついた契機となったのは、ともにマルサスの『人口論』を読んだことだったと言われている。生産される食糧に比して人口が過剰になれば、そこに必然的に食糧を奪いあう「生存闘争」が起きるからである。それが「女の国」でも起こったことだったのだろうか。

この女たちはそれにどう対処したのだろうか？

「生存闘争」によって、ではなかった。そうした闘争は結局、たがいに他より抜きん出ようとする育ちのよくない人びとに、永遠の苦しみをもたらすことになるだけだろう。何人かがトップに出ることはある、それも一時的に。しかし大多数は絶えず押しつぶされ、貧者と墮落した者からなるみじめな下層集団を形成する。そして誰にも静かな平和は訪れることなく、人びとのあいだにほんとうに高貴な資質が育つ可能性もない。

また、彼女たちは、苦闘する大衆を扶養するためのより多くの土地や食料を誰かほかの人から奪うために、略奪のための出征を行なうこともなかった。

そんなことをするかわりに、会議を開いて、とことん考えぬいた。彼女たちはひじょうに明晰な思考力の持ち主だったのだ。「わたしたちが要求する平和や快適さや健康や美しさや進歩の水準を保ったままで、この国が許容できるのは、最大限の努力をして、これこれの人数です。いいでしょう。では、その数を、この国の人数としましょう」

彼女たちは母親だったが、しかし国土、あらゆる土地を、いっぱいにあるいは過剰に満ち、そのあげくに自分の子が苦しみ、罪を犯し、たがいに戦いながら死んでいくのを見ることになる、意志をもたないみじめな母親ではない。彼女たちは自覚的に国民を創造する母親だ。彼女たちにとって、母性愛は野蛮な情熱でも、たんなる「本能」でも、まったく個人的な感情でもなく、一種の宗教だったのだ。(H68)

意識的に出産をコントロールする方法を見いだした「女の国」の住民たちは、ひとりの女性がひとりの子どもだけを出産することによって、「人口のバランス (balance of population)」を確保するようになっていたのである。その結果、「混雑」がなく、「日当たりも風通しもいい自由がいたるところに存在している」(H82) この国には、「生存闘争」ではなく、姉妹愛の原理——「姉妹愛の限りない感情、奉仕における幅広い一体性 (that limitless feeling of sisterhood, that wide unity in service)」(H69) ——が支配するユートピアが生まれたのである。

このことは、「女の国」の根本的原理として、何度もくりかえし触れられている——「王も司祭も貴族もいただいたことがない。全員が姉妹で、成長するときは、競争心によってではなく、一致団結して、ともに成長していく」(H60)、「ここでは人間的な母性愛 (Human Motherhood) がじゅうぶんに稼働しています。出自に由来する文字通りの姉妹愛 (sisterhood) と、社会的成長に由来する、それよりはるかに高邁で深遠な一致団結 (unity) 以外、ここにはなにもないのです」(H66)、「豊かに広く全体に広がっている姉妹愛、国家にたいするすばらしい奉仕、そして友情」(H96)。

奴隷だった支配者を打ち倒し、自分たちだけの姉妹愛の世界を形成し、集約農業のシステムをつくりあげる一方で出産をコントロールすることにより人口過剰を回避するという歴史的なプロセスのあとで、「女の国」の女性たちは、生存闘争から自由になったユートピアを創造したのである。このユートピアの特質は、それを訪れた3人の男性のうちでもっとも反フェミニズム的なテリー・ニコルソンによっていみじくも指摘されている。

「人生は闘争 (struggle) だ。そうでなければならない」と彼は言い張った。「もし闘争がなければ、そこに人生はない。それだけのことだ」

「それはナンセンスだ。男性的なたわごとだ」と平和主義者のジェフは答えた。彼は「女の国」の熱烈な弁護者となっていた。「アリは闘争によって多数を養っているわけではないだろう。ハチはどうだい？」

「昆虫にもどってアリ塚に住みたいというなら話はべつさ。生物がより高等になっていくのは闘争によってなんだ。闘い (combat) によってなんだ。だけどここにはドラマがない。あいつらの劇を見てみるがいい。うんざりだ」

その点はそのとおりだった。この国の演劇は、われわれの趣味からいえば、退屈なものだった。彼女たちは性的動機を欠いているから、嫉妬もない。敵対する国どうしの交渉もない。貴族制もなければ、それにまつわる野心もない。富める者と貧しい者の対立もない」(H99)

女性しかいない「女の国」は、両性のあいだの「闘争」が終息しているだけではなく、国家間の「闘争」も、階級間の「闘争」もない、その意味で「歴史の終焉」以後の世界にほかならない。これこそがこのユートピアの本質的特質なのである。というよりそれは、ユートピア一般の本質的特

質でもあるのかもしれない。『かえりみれば』のユートピアはどうであろうか。

ザ・グレート・トラストへいたる歴史

1887年5月30日、ボストン。曾祖父の残した財産で裕福に暮らす青年ジュリアン・ウェストは、自宅の地下の寝室で、「動物磁気学（催眠術）教授」（LB35）ドクター・ピルズベリーの催眠術をうけ眠りにつく。先祖が三代にわたり暮らしてきた邸宅のまわりに工場やスラムが迫ってきて、その騒音のため上階の部屋では眠れなかったからである。婚約者イーディス・バートレットと暮らす静かな新居は前年の冬にはできるはずだったが、「1873年の大恐慌以来ほとんど絶え間なくつづいているストライキ」（LB30）のため、それも完成が遅れに遅れ、その結果、結婚も延期を余儀なくされている。裕福な彼の心には労働者にたいする「特別な敵意」（LB32）がくすぶっている。

つぎにウェストが目をさましてみると、そこはまったくの別世界だった。目ざめた彼は2000年9月10日、ドクター・リートの家にいる自分を発見したのである。眠りについたあの夜、家が火事で全焼し、彼は地下室にとり残されたまま、113年間眠りつづけることになったのである。ドクター・リートに発見され蘇生された彼は、こうして20世紀末のユートピアに身を置くことになる。

煙突も煙もなく平和と繁栄を象徴するような美しい20世紀末のボストンをながめながら、ウェストは、19世紀末以降、どのような過程でこのユートピアがあらわれてきたか、とくに労働問題がどのようにして解決されたのかをリートに尋ねる。「産業進化の過程（industrial evolution）の結果」（LB49）というのがリートの答えだったが、それは要するに「資本の集中」（LB51）の過程にほかならない。「小資本小企業の時代が資本の大集積の時代にとってかわられ」（LB51）たのである。

この「資本の集中」は、一方でストライキに代表される労働者の抵抗を生む。肥大化していく会社のなかで「微小で無力な存在」と化していった個々の労働者は、「雇用階級にのぼる道も閉ざされ」たことも相俟って、「自己防衛のために仲間と団結」して「労働組織」（LB51）をつくるようになったのである。

しかし「資本の集中」は、その犠牲者さえ認めざるをえない決定的な長所をもっていた——すなわち、「国内産業の能率が驚異的に増大したことや、経営の集中と組織の統一とによって節約の効果が大きいにあがったこと」、そして「世界の富が以前には夢想もされなかったほどの割合で増加した」（LB53）ことである。たしかにそれは貧富の差を拡大させただろう。しかし「古い体制を復活させること」は、「諸条件をふたたび平等化し、個人の尊厳や自由を増大させるかもしれないが、そのために全般的な貧困と物質的進歩の停止という代価を支払う」（LB53）ことを意味していた。

そこで、資本集中による害を避けながら「資本統合が強力に富を生産するという原理の利益を享受する方策」（LB53）はないかと人びとは考えはじめたのである。その結果、実行されたのは、「独占企業化への趨勢は、その理論に従って進化を完成しさえすれば、人類に黄金の未来を切り開きうるひとつの過程なのであると認め」ながら、「今世紀のはじめに、国内の全資本を最終的に統合することによって、その進化（evolution）[を]完了」（LB53）させることだったのである。

こうして、「国民の生計が依存している工業と商業」という「本質的に公共的な事業」（LB54）であるべきものを、私的な個人に任せて私的な利潤追求をさせる自由放任主義的資本主義の経済システムから、国家がみずから「ほかのすべての企業を吸収した単一大企業」、「単一の資本家」、「唯一の雇用主」（LB53）、「ザ・グレート・トラスト」（LB54）となつて、「共同の利益をめざす共同の関心に従って運営」（LB53）を進める一種社会主義的な、あるいは「国家主義的」^{ナショナリズム}なシステムへ

の移行が達成されたのである。独立を果たすことによって自国の政治の運営をみずからの手にひきうけることになったのと同じように、国家単位の「ザ・グレート・トラスト」をつくりあげることによって、アメリカは自国の経済の運営をひきうけることになったのである。

この過程は、より大きな企業が小さな企業を合併し独占的な大企業となっていく、19世紀後半に進行していたトラスト化の方向を、そのまま連続的に国家単位にまで拡大したもので、「進化 (evolution)」という言葉であらわされている。この言葉の背後には、労働者階級が資本家階級を打ち倒すことによって非連続的に階級闘争を終息させるマルクス主義的な「革命 (revolution)」という言葉が意識されていることは言うまでもない。ドクター・リートが、この歴史的過程が「ひじょうな流血とおそろべき騒乱」をとまなうことなく、「国民全体の支持」(LB54)のもとに実現されたと述べていることも、そのことを暗示していると言っていいたいだろう(ただし、第26章で、バートン氏なる人物はこの出来事を、「あの最後の、もっとも大きな、そしてもっとも流血の少なかった革命」(LB190)と呼んでいる)。

こうして「産業進化の過程」をとおして、国家全体が一大トラストとなる経済システムが形成されることになるが、そのシステムの具体的な詳細については、第7章ならびに第12章で「産業軍 (industrial army)」という経済組織の説明をとおして語られている。しかし本論においては残念ながら省略せざるをえない。

ここで触れておきたいのは、20世紀はじめに行なわれたとされる、「ザ・グレート・トラスト」にいたるこの国家経済的変革が、その世紀の終わりにどのような歴史的な意味づけをあたえられているかということである。そのためには、まず、第26章にある「バートン氏の説教」を見るのがいいだろう。たとえば以下の箇所である。

「みなさん、もしも人間がふたたび19世紀のような猛獣の状態にもどったところを見たいと思うならば、みずからの同胞を天然の餌食と見なし、他人の損失を自分の利得と考えることを人間に教えた昔の社会と産業の体制を復活させさえすればいいのです。[中略]どんなにおとなしい動物でも、養わねばならぬ子をもっているときには猛々しいものですが、そこでかの狼のような社会では、パンを得るための闘争 (struggle) において、もっともやさしい感情ゆえの一種独特な死に物狂いの状態が見られたというわけです」(LB184-185)

「みなさんはあの最後の、もっとも大きな、そしてもっとも流血の少なかった革命の話を知っているでしょう。わずか一世代のあいだに人間は野蛮人の社会的因襲と慣習を捨て、合理的で人間的な存在にふさわしい社会秩序をとりいれたのでした。人びとは略奪の習慣をやめて協働者 (co-workers) となり、同時に同胞愛 (fraternity) のなかに富と幸福のわざを見いだしたのです」(LB190)

要するに、『かえりみれば』において記述される「ザ・グレート・トラスト」としてのユートピアにおいては、「パンを得るための闘争」、あるいは「人間どうしの生きんがための戦い、すなわちたんなる生存闘争」(LB185)としての歴史が終息し、それにかわって、「協働者」の「同胞愛」に支配された世界が実現されているのである。

「産業軍」のシステムについてのドクター・リートの説明のなかにも、以下のような言葉が見つ

けられる。

「ひとりひとりの人間は、その職業がいかに孤独なもののように見えようとも、じつは国全体、人類全体の規模の巨大な産業共同体の一員なのです。相互依存 (**mutual dependence**) の必要性は、相互扶助 (**mutual support**) の義務と保障をもふくむべきものです。あなたの時代にはそうでなかったからこそ、あなた方の体制に特有の残酷さや不合理が存在したのです」(LB98)

このすぐあとには「相互扶助」のかわりに、「民族の連帯 (**the solidarity of the race**)」あるいは「人間の兄弟愛 (**the brotherhood of man**)」(LB99) という言葉も用いられている。ちょうど『女の国』において、「闘争」の歴史が「姉妹愛」のユートピアへと移行していたように、『かえりみれば』においては、「闘争」の歴史が「兄弟愛」のユートピアへと移行しているのである。

そのようなものとして、『かえりみれば』のユートピアでは、『女の国』のユートピアと同様、国家間の闘争も、階級間の闘争も、性別間の闘争も終息している。

「わたしたちはいまでは戦争はしませんし、現在の政府は戦争力をもっていません」(LB55)

「今日では、万人が平等な富と平等な教養の機会を享受していますので、わたしたちは全部、あなた方のころのもっとも幸運だった階級に相当するただひとつの階級に属しているのです」(LB113)

「[あなたと同時代の人びとは]、男が自分たちだけで世界の全生産物を占有して、女性にその分け前を乞い求めさせることは、残酷であるのみならず盗賊行為ですらある、ということには思いつかなかったのです。[中略]いまの男女は完全に同等な人間、愛のみを求めあう求婚者としての気楽さで出会います」(LB177-178)

他のユートピアにおいてそうであったように、このユートピアのなかにも闘争の歴史の終焉というモチーフが刻まれていると、とりあえずは解釈していいだろう。

ダーウィニズムの警告

闘争の終息は、ダーウィニズム以後の思想空間のなかで、ひとつの不安とむすびつくものだった。それは退化 (**degeneration**) の不安である。たとえばダーウィンは『人間の由来』(*The Descent of Man*, 1871) のなかでこう述べていた。

人間も他の動物と同じく、きっと急速な増殖の結果の生存闘争を経て、今の高度な現状にまで前進してきたのである。これからもさらに高いところへ前進しようとするなら、なお厳しい闘争に従事しつづけなければならないのだということを気にすべきである。そうでないと人間は怠惰に沈み、人生の戦いにおいて、より才能を与えられた人々が恵まれていない人々よりいい結果を出すということもなくなってしまう。だからわれわれの自然な人口増加率は、たとえそれが多くの顕著な悪につながるとしても、けっして大きく下げてはならない。⁷

ダーウィンがマルサスの『人口論』から自然選択説の着想を得たということは前に述べた。そのマルサスの著作が18世紀末の啓蒙主義的ユートピアニズムに水をかけるものだったとするならば、ダーウィニズムは19世紀末から20世紀にかけてのユートピアニズムに暗い影を投げかけるものだったのではないだろうか。生物を人類のレベルまで高めてきたのが「生存闘争」だったとすれば、その闘争が終息してしまったこの時代のユートピアにはいったいなにが起こるのか。

この答えは「ダーウィンの番犬」と呼ばれたT. H. ハクスリー (Thomas Henry Huxley) の『進化と倫理』(*Evolution and Ethics*, 1893) のなかに、これ以上ないくらい端的に記されている。

生存闘争には、生存状況に順応するに適しないものを排除するという傾向がある。最強者、つまり、もっとも強く自己主張をするものは、ややもすれば弱者を蹂躪しようとするのである。[中略] 社会の進歩は、[このような] 宇宙的過程 (cosmic process) を一歩ごとにさまたげ、これに代えるに倫理的過程 (ethical process) とも称せられるべきものをもってする。⁸

人類の「社会の進歩」とは、「生存闘争」という「宇宙的過程」を阻害する方向で働くのであり、その特質は、闘争のなかで弱者が強者に蹂躪されることを妨害する「倫理的過程」のなかにこそある。しかし「生存闘争」が終息した結果として、生物学的には人類は下降線をたどらざるをえなくなる、そうハクスリーは述べるのである。

進化論は千年後の至福時代を期待するものではない。これからわれわれの地球が数百万年のあいだ、上昇線をたどるにしても、やがていつかは絶頂に到達して、それからのちは下降しはじめるであろう。⁹

われわれは、このような人類退化の不安の文学的表現を、ハクスリーの精神的弟子とも言えるH. G. ウェルズ (H. G. Wells) の『タイムマシン』(*The Time Machine*, 1895) のなかにあらわれる未来人種「エロイ」のなかに認めることができる。ユートピアのなかに発見されるその「人類の黄昏 (the sunset of mankind)」「人類の衰退期 (humanity upon the wane)」¹⁰ の風景は、ダーウィニズム以後のユートピアの不可能性にかんするもっとも雄弁な表現にほかならない。ユートピアのなかには当然のことながら生存闘争が存在してはならないが、しかし闘争が存在しないかぎり、ユートピアは遅かれ早かれ退廃の「下降」線をえがくことにならざるをえない……

このパラドックスこそ、ダーウィニズム以後のユートピアニズムがかならず孕まなければならないものであり、そこにユートピアの不可能性が暗示されているのである。

結論と今後の課題

われわれのあつかったふたつのユートピアは、姉妹愛と兄弟愛という相互扶助の原理にもとづいてそれが成立してくる歴史的過程をえがくなかで、それぞれに闘争の歴史の終焉というモチーフを強調していた。しかし闘争の終息は、当時支配的であったダーウィニズム的な思想空間のなかでは、人類退化の暗澹たる可能性を暗示せざるをえないものだった。ならばユートピアとは不可能性の別名なのであろうか。しょせんそれは「どこにもない場所」であるよりも、「どこにもありえない場所」ということなのだろうか。

『女の国』も『かえりみれば』もともに、「これからもさらに高いところへ前進しようとするなら、なお厳しい闘争に従事しつづけなければならない」というダーウィニズムの警告に無自覚だったわけではない。むしろこの警告は、ギルマンもベラミーも確実に意識していたものである。

たとえば、『女の国』に、「人生は闘争 (struggle) だ。そうでなければならない」、「生物がより高等になっていくのは闘争によってなんだ。闘い (combat) によってなんだ」というテリーの言葉があることは、すでに紹介してある。また、より注目すべきは、この作品のなかにある「否定的優生学 (negative eugenics)」(H69) という言葉である。優生学とは、自然選択が機能しなくなりつつあった文明 (= 「倫理」) 化した社会のなかで、自然選択の果たしていた機能を人為的に果たすことを期待されていた科学にほかならなかった。

他方、『かえりみれば』のほうにも、第25章に、「性選択 (sexual selection)」(LB179) のモチーフが導入されている。ダーウィンが『人間の由来』のなかで、自然選択と並行して存在している二次的な進化の要因として詳述しているこの観念は、ベラミーのユートピアのなかでは「否定的優生学」の役割を果たしている。

このように見ていくと、ギルマンもベラミーも、自分たちのユートピアにおける生存闘争の終息が意味することについて、それが暗示するユートピアの不可能性について、おそらく意識的だったと思われる。闘争のないユートピアがいかに退廃の「下降」線をたどることを免れるか、というダーウィニズム以降のユートピアニズムが必然的に孕むことになったアポリアは、ふたつのユートピアのなかでどのように解決されていくのだろうか。

それについては別稿を準備したい。

注

1. *The Bedford Glossary of Critical and Literary Terms*, eds. Ross Murfin & Supryia M. Ray (Bedford Books, 1998), p. 413
2. 『西洋思想大事典』(平凡社)「ユートピア」の項参照。
3. Edward Bellamy, *Looking Backward: 2000-1887* (A Signet Classic; New American Library, 1960), p. 154. 以下、本書からの引用は、本文中に括弧でLBと記したうえで、引用のページ数を数字で示す。また、和訳については『アメリカ古典文庫7 エドワード・ベラミー』中里明彦訳(研究社、1975年)を大幅に参照させていただいたが、同時に、字句を適宜変更させていただいた。記して謝意をあらわしたい。
4. Charlotte Perkins Gilman, *Herland* (The Women's Press, 1979), p. 7. 以下、本書からの引用は、本文中に括弧でHと記したうえで、引用のページ数を数字で示す。
5. 進歩の観念にもとづいて、理性の拡大とともに、人類がユートピアに到達することを歴史的必然としている楽観的なユートピア論のこと。
6. ベラミー自身はみずからの立場を「国家主義 (nationalism)」と呼び、社会主義と呼ばれることを嫌っていた。その理由については、彼が1891年に『ニュー・ネーション』という週刊誌に連載した「ナショナリズムについて」という論文のなかの「ナショナリズムと共産主義、社会主義とのちがいについて」というセクションを参照。『アメリカ古典文庫7 エドワード・ベラミー』にはこの論文の翻訳も収録されている。しかしエリッヒ・フロムは、それにもかかわら

ず、ベラミーのユートピアが社会主義的であり、マルクス主義的でさえあると述べている (See Erich Fromme, "Foreword" in Edward Bellamy, *op. cit.*, pp. xv-xx.)。

1888年以降、『かえりみれば』におけるベラミーの「国家主義的」アイデアを議論し宣伝したり、政治活動につなげていこうとする動向が起こり、そのためのクラブが組織されるが、そのクラブは「ナショナリスト・クラブ (the Nationalist Club)」と名づけられている。本間長世「ベラミー『かえりみれば』の現代性」『アメリカ古典文庫7 エドワード・ベラミー』、pp. 15-16を参照。ただし、『かえりみれば』のなかでは、「ザ・グレート・トラスト」形成を実践した政党は、「国民党 (the national party)」(LB170-171) と名づけられている。

ちなみに、じつはギルマンも、1890年から95年にかけての期間を中心にして、「ナショナリスト・クラブ」のために講演者として活躍していた。その意味で彼女もベラミーの影響圏のなかにいた作家だったと言っていいだろう。彼女のユートピアニズムは少なくともその一部分はベラミーの「ナショナリズム」と重なっているのである。See Carol Farley Kessler, *Charlotte Perkins Gilman: Her Progress Toward Utopia with Selected Writings* (Liverpool UP, 1995), p. 23.

7. Charles Darwin, *The Descent of Man and Selection in Relation to Sex*, 2nd edn. (John Murray, 1882), p. 618.
8. T. H. Huxley, *Evolution and Ethics*, rep. in James Paradis and George C. Williams, *Evolution and Ethics* (Princeton Univ. Pr., 1989), p. 139.
9. *Ibid.*, p. 143.
10. H. G. Wells, *The Time Machine* in H. G. Wells, *Selected Short Stories* (Penguin Books, 1958), p. 31.